



「ムーンライト」

構成・演出：村川拓也

ドラマトゥルク：林立騎

出演：中島昭夫、塩原結菜、中野ひかる、伊東沙希子、小泉かをり

舞台監督：浜村修司

照明：霞田野浩介 (RYU)

音響：佐藤武紀

映像：城間典子、北川航平

演出補佐：長澤慶太 (京都芸術大学 舞台芸術研究センター)

演出部：中井尋央 (URAK)

プロデューサー：武田知也

制作：清水 翼 (KANKARA Inc.)

製作：ロームシアター京都  
(初演 2018年12月 京都市西文化会館ウエスティ)

キャスティングコーディネーター：山口弓枝

宣伝美術：TAICHI ABE DESIGN INC.

記録写真：石川 純

記録映像：米倉 伸

制作：鈴木千尋 (フェスティバル/トーキョー)

主催：フェスティバル/トーキョー

“Moonlight”

Conceived and Directed by Takuya Murakawa

Dramaturge: Tatsuki Hayashi

Performers: Akio Nakashima, Yuina Shiohara, Hikaru Nakano, Sakiko Ito, Kaori Koizumi

Stage Manager: Shuji Hamamura

Lighting: Kousuke Ashidano (RYU)

Sound: Takenori Sato

Video: Noriko Shiroma, Kouhei Kitagawa

Assistant Director: Keita Nagasawa  
(Kyoto Performing Arts Center, Kyoto University of the Arts)

Stage Assistants: Hiroo Nakai (URAK)

Producer: Tomoya Takeda

Production Coordinator: Tsubasa Shimizu (KANKARA Inc.)

A ROHM Theatre Kyoto production

Premiere: December 2018, Kyoto City Nishi Culture Hall

Casting Coordinator: Yumie Yamaguchi

Publicity Design: TAICHI ABE DESIGN INC.

Photography: Jun Ishikawa

Video Documentation: Shin Yonekura

Production Coordinator: Chihiro Suzuki (Festival/Tokyo)

Presented by Festival/Tokyo

フェスティバル/トーキョー20  
会期 令和2(2020)年10月16日(金) - 11月15日(日)  
会場 東京芸術劇場/トランパル大塚/豊島区内商店街/F/T remote (オンライン会場)ほか

フェスティバル/トーキョー実行委員会

顧問 野村 高 (公社)日本芸能実演家団体協議会会長 能楽師

名誉実行委員長 高野之夫 豊島区長

実行委員長 福地茂雄 (公財)新国立劇場運営財団 顧問  
(公社)企業メセナ協議会 顧問  
アサヒグループホールディングス株式会社 社友

副実行委員長 市村作知雄 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 顧問

藤田 力 豊島区文化商工部長

小澤 弘一 (公財)としま未来文化財団 事務局長

尾崎元規 (公社)企業メセナ協議会 理事長

花王株式会社 顧問

熊倉純子 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授

中田雅史 アサヒグループホールディングス株式会社  
日本経基本部 事業企画部 理事

渡邊裕之 東京商工会議所豊島支部 会長

永井多恵子 (公財)せたがや文化財団 理事長

小倉 桂 豊島区文化商工部文化デザイン課長

蓮池奈緒子 (公財)としま未来文化財団  
あうるびろ (豊島区立舞台芸術交流センター) 支配人

米原晶子 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長

長島 隆 フェスティバル/トーキョー デレクター

河合千佳 フェスティバル/トーキョー 共同ディレクター

葦原門花 フェスティバル/トーキョー 事務局長

監事 能登絹子 豊島区総務部総務課長

法務アドバイザー 福井健策、北澤尚登 (骨董通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

ディレクター 長島 隆

共同ディレクター 河合千佳

事務局長 葦原門花

制作 藤島麻希、嶋田敬介、柚木桃香、鈴木千尋、藤井友理、長田崇史、山崎昌雄、

猪狩裕子、岩間麻衣子、植松侑子 (合同会社syuz.gen)、金井美希、可田由幸、

萩谷早枝子、宮内芽依、宮武唯季、宮本晶子 (合同会社syuz.gen)

コミュニケーションデザイン (広報/教育普及) チーフ 小倉明紀子

コミュニケーションデザイン (広報/教育普及) 名取萌音、岡野乃里子、細川浩伸

コミュニケーションデザイン (広報/教育普及) アシスタント 森川清成、植田あす美

票券チーフ 武井和美

渉外 太田志保

経理 堤 久美子  
五藤 真、中山恭一 (株式会社countroom)

総務 米原晶子

技術監督 寅川英司

照明コーディネーター 木下尚己 (株式会社ファクター)

音響コーディネーター 相川 晶 (有限会社サウンドウィーズ)

アートディレクション 高田 唯 (Allright Graphics)

デザインコーディネーター 北條 舞 (Allright Graphics)

デザイン 齊藤拓実 (Allright Graphics)

イラスト 芳賀あきな

音楽 (PR動画) 東郷清丸 (Allright Music)

PR動画 ダイノサトウ

ウェブサイト 相澤 俊 (Mtame株式会社)

海外広報・翻訳 ウィリアム・アンドリュース

作品紹介文 鈴木理映子

主催 フェスティバル/トーキョー実行委員会

豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/NPO法人アートネットワーク・ジャパン、

東京芸術祭実行委員会/豊島区/公益財団法人としま未来文化財団、フェスティバル/  
トーキョー実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団 (東京芸術劇場・アーツ  
カウンシル東京)

「トランスフィールド from アジア」助成 国際交流基金アジアセンターアジア文化創造協働助成

後援 外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM

特別協力 西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、サンシャインシティ、

ジュンク堂書店 池袋本店、理想科学工業株式会社、星野リゾート OMO5東京大塚

協力 東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、

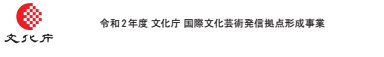
一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、

池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人ゼツナー池袋まちづくり、

ホテルトビイロシティ、ホテルグランドシティ、池袋ホテル会、

サンシャインシティプリンスホテル、ホテルリゾル池袋

宣伝協力 株式会社ポスター・ハリス・カンパニー



フェスティバル/トーキョー20は東京芸術祭2020の一環として開催いたします



発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒171-0031東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4F TEL: 03-5961-5202 FAX: 03-5961-5207 https://www.festival-tokyo.jp/20.html  
編集：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 編集協力：鈴木理映子 アートディレクション：高田 唯 (Allright Graphics) デザイン：山田智美 (Allright Graphics)

Festival/Tokyo 2020  
Dates  
Friday, October 16–Sunday, November 15, 2020

Venues  
Tokyo Metropolitan Theatre, TRAM-PAL Otsuka, shopping streets in Toshima, online, and other locations

Festival/Tokyo Executive Committee

Advisor:  
Mai Nomura (Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Noh actor)

Honorary President of the Executive Committee:  
Yukio Takano (Mayor of Toshima City)

Chair of the Executive Committee:  
Shigeo Fukuchi (Advisor, New National Theatre Foundation; Advisor, Association for Corporate Support of the Arts; Senior Alumnus, Asahi Group Holdings, Ltd)

Vice Chairs of the Executive Committee:  
Sachio Ichimura (Director, NPO Arts Network Japan)  
Chikara Fujita (Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City)  
Koichi Ozawa (Administrative Director, Toshima Mirai Cultural Foundation)

Committee Members:  
Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts; Corporate Advisor, Kao Corporation)  
Sumiko Kumakura (Professor, Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts)  
Masashi Nakata (Senior Officer, Business Planning Department, Japan Headquarters, Asahi Group Holdings, Ltd)  
Hiroyuki Watanabe (Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima)  
Taeko Nagai (Chair, Setagaya Arts Foundation)  
Kei Ogura (Director, Cultural Design Section, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City)  
Naoko Hasuike (Toshima Mirai Cultural Foundation; Executive Director, Owlspot Theatre/Toshima Performing Arts Center)  
Akiko Tomihara (Representative, NPO Arts Network Japan)  
Kaku Nagashima (Director, Festival/Tokyo)  
Chika Kawai (Co-Director, Festival/Tokyo)  
Madoka Ashihara (Administrative Director, Festival/Tokyo)

Supervisor:  
Kinuko Noto (Director, General Affairs Section, General Affairs Division, Toshima City)  
Legal Advisors:  
Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat

Director: Kaku Nagashima

Co-Director: Chika Kawai

Administrative Director: Madoka Ashihara  
Production Coordinators: Maki Fujishima, Keisuke Shimada, Momoka Yunoki, Chihiro Suzuki, Yurii Fujii,  
Takashi Otsuki, Masao Yamagata, Yuko Igari, Maiko Iwama, Yoko Umatsu (syuz/gen), Miki Kanai, Yoshiyuki  
Shida, Saeko Hagiya, Mei Miyauchi, Aki Miyatake, Shoko Miyamoto (syuz/gen)  
Communication Design Director (PR, Education & Outreach): Akiko Ogura  
Communication Design (PR, Education & Outreach): Mone Natori, Noriko Okano, Hironobu Hosokawa  
Communication Design Assistants (PR, Education & Outreach): Kiyonari Morikawa, Asumi Ueda  
Ticket Manager: Kazumi Takei  
Liaison Officer: Shiho Ota  
Accounting: Kumiko Tsutsumi, countroom (Makoto Gotoh, Kyoichi Nakayama)  
Administrator: Akiko Yonehara

Technical Director: Eiji Torakawa  
Lighting Coordinator: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)  
Sound Coordinator: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)  
Art Director: Yui Takada (Allright Graphics)  
Design: Takumi Saito (Allright Graphics)  
Design Coordinator: Mai Hojo (Allright Graphics)  
Illustrator: Akina Haga  
PR Video Music: Kiyomaru Togo (Allright Music)  
Publicity Video: Dino Sato  
Website: Shun Aizawa (Mtame, Inc.)  
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews  
Copywriting: Rieko Suzuki

Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee (Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, NPO  
Arts Network Japan [NPO-ANJ]), Tokyo Festival Executive Committee (Toshima City, Toshima Mirai  
Cultural Foundation, Festival/Tokyo Executive Committee, Tokyo Metropolitan Foundation for History and  
Culture [Tokyo Metropolitan Theatre & Arts Council Tokyo])

“Transfield from Asia” Grant:  
The Japan Foundation Asia Center Grant Program for Promotion of Cultural Collaboration  
Endorsed by the Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, J-WAVE 81.3 FM Special cooperation from SEIBU  
IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD.,  
Sunshine City, Jankudo Ikebukuro, RISO KAGAKU CORPORATION, Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka

In cooperation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street  
Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association,  
Toshima Corporate Taxpayers’ Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr,  
Hotel Metropolitan Tokyo Ikebukuro, Hotel Grand City Ikebukuro, Ikebukuro Hotel Association, Sunshine  
City Prince Hotel, HOTEL RESOL IKEBUKURO

PR Support: Poster Hari’s

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2020

Festival/Tokyo 2020 is organized as part of Tokyo Festival 2020.

# ムーンライト

構成・演出：村川拓也

# Moonlight

Conceived and Directed by Takuya Murakawa

10.31 Sat – 11.1 Sun

東京芸術劇場 シアターイースト

Tokyo Metropolitan Theatre (Theatre East)

フェスティバル/トーキョー20 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO



## よりシンプルにわかりやすくなっている。

### ——村川拓也インタビュー

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——今回は二つの期間に分けて話を聞かせてください。ひとつ目は前回、私がBlog Camp in F/Tの参加者としてインタビューさせていただいた※1 2012年から『ムーンライト』初演（18年）までの間とし、村川さんの中で印象に残っていること、どのような経緯で『ムーンライト』制作に至ったのかをお聞きます。二つ目は『ムーンライト』初演から今回のF/T参加までの間で、主に再演についてお話を伺います。まずは12年以降、印象に残っている出来事や、思考の変化などがあれば教えてください。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

演劇に対する姿勢は2012年のインタビュー内容から変わっていません。ただし、自身の環境には変化がありました。実は14年に結婚し、18年に子供が生まれ、20年8月に二人目の子供が生まれました。12年頃は岡田利規さんのようにステップアップをしていきたいと考えていましたが、そのためには演劇に費やす時間を増やさなければいけません。でも、どこかのタイミングで自分の能力や生活とのバランスを見て、自然と諦めていました。言い換えれば、世界中から求められる演出家ではなく、身近な題材と人たちで作品を作り、興味を持ってくれる人に届けるスタンスを模索するようになりました。身近な人たちには積極的に作品を届けたいと思っていて、『ムーンライト』が完成した時もF/Tディレクターの長島確さんに上演する機会がないか相談しにいったりしてました。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——特に『ムーンライト』を人に見て欲しいと思った理由がありますか。

KYOTO EXPERIMENT 2017で『インディペンデントリビング』という作品を上演したのですが、自分の納得がいかないまま終わってしまい、一時期は演劇を辞めることまで考えていました。その際、改めて演劇を勉強し直そうと思ひ立ち、地点の三浦基さんに相談したところ、「明日から来い」と言って頂き、しばらく地点の稽古場に通ってました。この経験がとても勉強になり、気づけばあれやこれや考えていたことがそぎ落とされた感覚になっていました。つまり、自分の中にあるものを見直して、落ち着いてやればいいことに気づいたのです。その後、『インディペンデントリビング』はドイツのブラウンシュバイクで開催されるテアターフォルメンで再演する機会を頂いたのですが、初演10日前に現地入りし、一つ一つ丁寧に点検する感覚で調整をしたところ、自分の中で納得で

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

どのような経緯で出会ったのですか。林さんとの出会いは衝撃的で、非常に影響を受けました。当時ロームシアター京都に在籍されていた武田（知也／本作のプロデューサー）さんが、この作品も含め、「CIRCULATION KYOTO ― 劇場編」で上演する作品には全てドラマトゥルクをつけるという提案をされ、林さんを紹介してもらいました。林さんに対しては非常に怖いイメージを持っていたのですが、居酒屋に行ってお酒を飲みながらいろんな話をしていくうちに打ち解けました。林さんの姿勢は圧倒的に普通というか、多くの人に観にきてほしいから近所のお店にチラシをばら撒いたり、作品を作るうえで筋の通らないことが起こった時は徹底的に抗う姿を見て、色々と学ばせていただきました。昔は遠い存在だったのが、対話を通して徐々に身近な存在になっていきました。また、作品を作る時は終始同じ距離感で接してくれるので、それは非常にやりやすかったです。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——これまで村川さんの作品を観てきた方々から『ムーンライト』を観た感想はありましたか。

「どーゆうこと？」って言われました(笑)。自分の作品には演劇の構造を使ったコンセプトualなイメージを持たれている方が多いと思うのですが、『ムーンライト』は非常にオープンな作品、つまりストーリーに裏が無く、観客にとって非常に分かりやすい作品なので、これまで自分の作品を観て頂いた方々は困惑に近い印象を持たれたのだらうと思います。ただし、自分の中で変わったつもりは無く、自分の中で「人間が生きていることを描きたい」という想いは昔から一貫していて、ただ手法が分かりやすくなっただけだと思います。その分かりやすさが要因だと思いますが、『ムーンライト』の反響は大きかったですね。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——反響については意識されているのですか。

『ムーンライト』を終えて、反響あってこそその作品だと考えるようになりました。これまでの作品はやりっぱなしで終わってカッコつけていた部分があったと思うのですが、今はすごく反省しています。良くも悪くも感想を言いに来してくれることは大切ですし、反響がないものは作品と呼んでいいのかとまで考えるようになりました。『ムーンライト』は自分の作品に対する向き合い方、そして演出家としての振る舞い方を変えたきっかけになった作品なので、単純にまた見て欲しいという想いに至り、長島さんに素直に相談できたのだと思います。

### 「反響」をつくることから

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——この作品では、演劇研究者で翻訳者の林立騎さんがドラマトゥルクとして参加されていますが、林さんとは

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

どのような経緯で出会ったのですか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

林さんとの出会いは衝撃的で、非常に影響を受けました。当時ロームシアター京都に在籍されていた武田（知也／本作のプロデューサー）さんが、この作品も含め、「CIRCULATION KYOTO ― 劇場編」で上演する作品には全てドラマトゥルクをつけるという提案をされ、林さんを紹介してもらいました。林さんに対しては非常に怖いイメージを持っていたのですが、居酒屋に行ってお酒を飲みながらいろんな話をしていくうちに打ち解けました。林さんの姿勢は圧倒的に普通というか、多くの人に観にきてほしいから近所のお店にチラシをばら撒いたり、作品を作るうえで筋の通らないことが起こった時は徹底的に抗う姿を見て、色々と学ばせていただきました。昔は遠い存在だったのが、対話を通して徐々に身近な存在になっていきました。また、作品を作る時は終始同じ距離感で接してくれるので、それは非常にやりやすかったです。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——林さんとは具体的にどのような関係で作品を作っていたのでしょうか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

林さんは制作を進めるうえでの相談相手になってくれつつ、パンフレットも作ってくれました。パンフレットを作った理由として、林さんは「村川さんの作品を論じる文章が少なすぎる」という考えを持っていたからです。私自身も作品ごとに文章を残すことは作品に対する理解も深めて頂けるし、アーカイブにもなるので非常にありがたいなと思っています。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——テキストを通して反響を受け取ることも、村川さんにとっては、作品をつくる一連の行為であるということですね。これまでつくってきた中で、印象に残っている反響はありますか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

『ツァイトゲーバー』※2をベルリンで上演した際（14年）、ハンス＝ティース・レーマンさんとアフタートークをしたのですが、婦りがけに「次の新作は、自分の作品の中で最もコンセプトualな作品（『エヴェレットゴーストラインズ』の初期案）になりそうなのですが、コンセプト過多と感じないか？」と相談したところ、「君は感情とユーモアを大切にすから、コンセプトualな作品を作っても問題ない」と言って頂き、とても力になりました。また、佐々木敦さんが『エヴェレットゴーストラインズ』上演後にSNSで、「村川の作品はコンセプトualであることだけに満足せず、演劇の時間の流れをしっかり作るから良い」とコメントしてくれたことが嬉しかったです。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——お二人から頂いた反響は、村川さんの作品に影響

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

を与えていますか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

今でも作品をつくる上で、感情と時間の流れを必ず考えています。出演者がどの様に舞台上の時間を過ごしていくか、そのことを考える頼りとなるのが出演者の感情です。ある行為をした後にどのような行為につなげるべきかを考える際、出演者の気持ちの変化を踏まえて作り上げていきます。でもこれは、出演者にとって本当の感情という場合だけではなく、私が勝手に出演者の感情を想定して考えているところもあると思います。出演者の感情とギャップがあるという意味では、フィクションを作っているとっていいのかもしれませんが。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——『ムーンライト』を制作する際、どのようにして感情の流れを作っていたのでしょうか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

出演者である中島昭夫さんの家に通い、74年間の人生をカメラの前で話して頂くことから始めました。構成は記録映像を編集しながら作っていったので、1本のドキュメンタリー映画を作っていくような感覚に近かったです。映像に合わせてピアノの曲を合わせてみたりしながら、詳細を詰めていきました。稽古の代わりに映像を編集しながら構成考えたのは初めての試みです。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——作られた映像と、実際にできあがった作品とでは、どの程度ギャップがありましたか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

できあがった映像の音声部分の中島さんに聞いてもらったのですが、普段は話が飛びがちな中島さんが、編集されたものの中では綺麗に話し過ぎていて、リアルとのギャップがあることにつまらなさを感じてしまい、途中で再生を止めました。結局、ざっくり話す内容だけ決めておいて、後は即興で話すことにしました。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——即興でインタビューをする形式は、上演回数を重ねるごとに内容が変わりそうですね。村川さん自身が舞台上上がってインタビューをするという形式は初めてですか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

『エヴェレットゴーストラインズ』のBバージョンとして位置付けている作品では、私のドキュメンタリー映画の先生であった佐藤真さんの教え子に対してインタビューしたのですが、この形式がうまくいったので、『ムーンライト』でも違和感なく取り入れています。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——それでは2018年の『ムーンライト』初演から現在に至るまでのお話を伺います。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

『ムーンライト』終了後に『Pamilya（パミリア）』という

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

高齢者施設での介護を扱った作品を作りました。『Pamilya』は『ツァイトゲーバー』と同じ手法を用いていますが、構成はより分かりやすくなっています。『Pamilya』は2020年2月に福岡市で上演したのですが、当時はコロナ・ウィルスの影響が騒がれた頃だったので、公演の判断が難しい時期でした。自分の中では延期だと決めていましたが、ゲネプロを観て開始10分後には予定通り上演しようと気持ちが変わっていました。その理由として単純に面白いものができたということと、この日に向けて作ってきたエネルギーをなくしてしまうのはもったいなかったからです。演劇に限らず、あらゆる作品は社会と繋がっていないとリアルなモノはできないと考えているのですが、この時は社会情勢に関係なく、たとえ観客が5人であっても絶対やるべきだという考えになっていました。作品とはそれほど独立したものであり、何事にも邪魔されないものであることに気づいた瞬間でした。実はF/Tでは『ムーンライト』と『Pamilya』の2本立てで上演する予定でしたが、コロナ・ウィルスの影響で上演が不可能になってしまったため、今回『Pamilya』については先行してトークイベントを公開しています。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——2020年2月は上演の判断が難しい時期でしたが、その後はほぼ全ての演劇が延期、もしくは中止になりました。村川さんは2020年3月以降どのように過ごされていたのですか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

演劇のことは一切やっていませんでした。奥さんがアクセサリーのデザイナーをしているのですが、経営に関して他の商業同様にけっこう打撃を受けてしまい、そちらの対応に追われていました。加えて8月に子供が生まれたので、そこまではコロナ・ウィルスに感染しないように注意しながら過ごしていました。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——2020年8月以降、東京での再演に向けてどのような活動をされているのですか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

『ムーンライト』のテーマは「地域と劇場」が根底にあります。東京で再演する際も、ピアノの発表会を行っている文化会館で、地域の人達に弾いて欲しいと思っていました。現在は東京でピアノを演奏してくれる出演者を探していますが、初演の時よりは動き回れないので、動き回らなくても出演者を探す方法を考えました。奇跡的に、素晴らしい出演者を見つけることが出来ました。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——今回のF/Tでは再演という形になりますが、初演から大きく変わるのでしょうか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

再演を考え始めた当初は東京で上演することを意識していましたが、初演の映像を見直したら、かなり細か

く作り込まれていたので、今は初演の構成を崩すことは難しいと思っています。多くの再演作品が同じだと思えますが、結局は最初に考えた構成に戻るんですよ。ただし、コロナ・ウィルスによって社会を取り巻く環境が変わったので、作品の内容は変わらなくても、観る側の捉え方は変わるだろうと思います。また、ブラックボックス型の劇場でやることの意味も考えています。よりフィクショナルな作品になる可能性はありますね。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——『ムーンライト』再演が観客にどう捉えられるか、イメージされていることはありますか。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

劇場に入ってリハーサルをする段階ではイメージできるかもしれませんが。ひょっとしたら本番中に、話す内容が現在の状況とリンクする発見があれば、即興で修正することはありえます。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

——それでは最後に今後の活動について伺います。

これまで以上にフィクション色の強い作品を作りたいと思っています。長島確さんは、20世紀以降の芸術が本物のモノや人「そのもの」を提示することを指向してきたが、そろそろフィクションを再発見する必要があるのではないかと話していました。それはただ、現実の反動としてのフィクションではなく、現実を突き詰めた先にフィクションを作れないかという事だと考えています。かつて自分の作品に出演してくれた人にもう一度集ってもらい、例えば、『Pamilya』や『ツァイトゲーバー』に出てくれた出演者が同じ役柄で出演し、別の新しい作品をつくってみるのはどうかとか、思考をめぐらせています。

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）

※1 『言葉』の彼方へ:村川拓也インタビュー（http://murakawatakuya.blogspot.com/2012で閲覧可能）

※2 F/T11公募プログラム参加作品。介護する／されるの関係が舞台上で再現される。被介護者役は客席から募れる。

（聞き手・構成：宮崎敦史）

2012年12月、村川拓也（左）と作家の宮崎敦史（右）



**村川拓也**
演出家、映像作家。映像、演劇、美術など複数の分野を横断しつつ、ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品を発表する。介護する／される関係を舞台上で再現する『ツァイトゲーバー』(F/T11公募プログラム)は、HAU（ベルリン)の『Japan Syndrome Art and Politics after Fukushima』(14)を始め国内外で上演を重ねている。16年東アジア文化交流使(文化庁)として中国・上海／北京に滞在。18年ロームシアター京都『CIRCULATION KYOTO-劇場編』にて『ムーンライト』(助成:公益財団法人セゾン文化財団)初演。フェスティバル/トーキョーには『言葉』(12)以来の参加となる。京都芸術大学舞台芸術学科・映画学科非常勤講師。